

スポーツ科学研究, 15, 39-55, 2018 年

2018 年冬季平昌オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた大韓民国における オリンピック・パラリンピック教育の実態に関する調査報告

A survey report on the actual situation of the Olympic and Paralympic education in Republic of Korea
for the 2018 Winter Pyeongchang Olympic and Paralympic Games

友添秀則¹⁾, 深見英一郎¹⁾, 吉永武史¹⁾, 岡田悠佑¹⁾, 根本想²⁾, 竹村瑞穂³⁾,
小野雄大¹⁾, 青木彩菜¹⁾, 一之瀬貴⁴⁾
¹⁾早稲田大学スポーツ科学学術院
²⁾早稲田大学スポーツ科学研究センター
³⁾日本福祉大学スポーツ科学部
⁴⁾早稲田大学研究戦略センター

Hidenori Tomozoe¹⁾, Eiichiro Fukami¹⁾, Takeshi Yoshinaga¹⁾, Yusuke Okada¹⁾,
So Nemoto²⁾, Mizuho Takemura³⁾, Yuta Ono¹⁾, Ayana Aoki¹⁾, Takashi Ichinose⁴⁾
¹⁾ Faculty of Sport Sciences, Waseda University
²⁾ Waseda Institute for Sport Sciences
³⁾ Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University
⁴⁾ Center for Research Strategy, Waseda University

キーワード: スポーツ庁, オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業,
2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会

Key words: JAPAN SPORTS AGENCY, Olympic & Paralympic Empowerment,
TOKYO 2020 Olympic & Paralympic Games

【抄録】

本稿は, 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会(以下「2020 東京オリ・パラ」と略す)に向けたオリンピック・パラリンピック教育(以下「オリ・パラ教育」と略す)の展開の方向性を探るために, 2018 年冬季平昌オリンピック・パラリンピック競技大会(以下「平昌オリ・パラ」)に向けたオリ・パラ教育の取り組みの実態を明らかにすることを目的とした。上記目的を達成するために, 韓国におけるオリ・パラ教育の中心である平昌大会組織委員会の Education Team の関係者(2 名)へのインタビュー, 学校におけるオリ・パラ教育の実践視察(2 校), 実際に授業を受けた生徒へのインタビュー(3 名), そしてオリ・パラ教育関連施設の視察を実施した。

調査の結果, 韓国における「Education」, 「Culture」, 「Cooperation」の 3 つの分野から構成されているオリ・パラ教育を整理し, 日本のオリ・パラ教育に対して, 以下のような示唆を得ることができた。制度に関しては, さらなる組織的な連携の必要性が示唆された。実践に関しては, 学校教員がアクセスしやすいオリ・パラ教育用ホームページの運営, UNESCO SCHOOL などの既存の教育プログラムとの連携, パラリンピック関連のプログラムの充実, 文化的プログラムの充実, そしてオリ・パラ関連施設の活用が示唆された。

スポーツ科学研究, 15, 39-55, 2018 年, 受付日: 2017 年 10 月 27 日, 受理日: 2018 年 3 月 17 日
連絡先: 友添秀則 〒359-1192 所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学スポーツ科学学術院

tomozoe@waseda.jp

I. 緒言

2020 年の東京夏季オリンピック・パラリンピック競技大会(以下「東京オリ・パラ」と略す)に向けて、大会開催決定後から、政府(スポーツ庁)や大会組織委員会、東京都などの関連組織が主導して積極的にオリンピック・パラリンピック教育(以下「オリ・パラ教育」と略す)に取り組んでいる^{注 1)}。しかし、日本におけるオリ・パラ教育の取り組みは、少しずつ成果が蓄積される一方で、課題も指摘され始めている。例えば、日本全国でのオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの展開を意図して2016 年から本格的に始動している「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」^{注 2)}では、以下の課題が挙げられている。

オリンピックとパラリンピックのバランスのとれた理解や関心を高めるための方法

持続可能なオリンピック・パラリンピック教育の実現のための方法

地域や国民全体のオリンピック・パラリンピックへの関心を高めるための方法

(早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター, 2017)

オンライン(デジタル)教材の活用方法

学習指導要領とオリンピック・パラリンピック教育を関係づけた実践の方法

各地域の特色を生かしたオリンピック・パラリンピック教育実践の方法

(筑波大学オリンピック教育プラットフォーム, 2016)

オリンピック・パラリンピックの理念に対する教育プログラムの効果の検証

(日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業 2017)

このように、主にオリ・パラ教育の実践方法に関して課題が山積していることがわかる。しかし、現状ではこれらの課題に対して明確な回答は得られておらず暗中模索が続いている。このような日本のオリ・パラ教育の現状を鑑みると、先行的に実施されているオリ・パラ教育の取り組みが一つ

の手がかりとなろう。

そこで本センターでは、2018 年に平昌冬季オリンピック・パラリンピック競技大会(以下「平昌オリ・パラ」と略す)が開催される大韓民国(以下「韓国」と略す)のオリ・パラ教育の取り組みを明らかにするための調査を実施した。韓国のオリ・パラ教育に着目したのは、直近でオリンピック・パラリンピック競技大会(以下「オリ・パラ」と略す)が開催される^{注 3)}こと及びこれまで韓国におけるオリ・パラ教育の実態が明らかになっていないこと^{注 4)}以上に、次のような理由がある。1 つ目は、スポーツに対する態度の類似性である。金(2011)によれば、現在韓国で行われている野球、バスケットボール、バレーボールなどのスポーツは、1903 年に創設された「皇城基督教青年会」(YMCA の朝鮮における別称)を通じて1900 年代半ばから1910 年代にかけて導入され、普及していった。このような外来文化としてのスポーツという立場は日本も同様であり、このことはスポーツの祭典であるオリ・パラを開催する際の文化的な類似性を意味している。2 つ目は、教育制度の類似性である。ローラント・ナウル(2016)は、「一般に、学校での体育やスポーツ教育の一環としてオリンピック教育を普及させることについて述べるのは簡単ではない」(ローラント・ナウル, 2016, p. 135)と指摘し、その理由として教育制度、特に国家的カリキュラムの有無やその柔軟性の差異を指摘している。他方で韓国は、6-3-3 制を導入しており、日本における学習指導要領に相当する教育課程が存在する^{注 5)}。さらに、学校体育においては、生涯にわたって運動やスポーツに関わっていくことができる人間の育成を目標としていることも類似している(朴, 2014)。つまり、学校におけるオリ・パラ教育を実施するうえでの前提となる学校教育制度及び教育課程の類似性があると言える。3 つ目は、日本におけるオリ・パラ教育の方向性である。「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告」^{注 6)}によれば、「(4)全国的なオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの展開」の中で、以下のように述べられている。

東京大会前後には、中国・韓国、また日本全国各地で

大規模な国際競技大会が多く開催される・・・(中略)・・・これらを通じてアジアひいては世界に向けてスポーツの価値の共有を図り, 大会開催の機運を高めていくことが重要である

(オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議, 2016, p. 12)

つまり, 2018 年の平昌オリ・パラ(韓国), 2020 年の東京オリ・パラ(日本), そして2022 年の北京冬季オリンピック・パラリンピック競技大会(中国)とアジアで連続してオリ・パラが開催されることが決定している中で, これまで以上に中国, 韓国との連携が重要であるということである. このような課題に対して, 本調査のように各国のオリ・パラ教育の実態を把握し情報の共有を図ることの重要性は高いと言えよう. また, 本調査は平昌オリ・パラが開催される約 5 ヶ月前に実施した. というのも, そもそもオリ・パラ教育は, スポーツやオリ・パラの価値を広めることで大会開催への機運を醸成することに留まらず, 「有形・無形のレガシー」(オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議, 2016, p. 1)として成果を残していくことを目的とし

た継続的な活動である. そのため, 大会準備期, 大会開催期, そして大会後に継続的なオリ・パラ教育の取り組みの実態調査や効果検証が必要となる^{注 7)}. つまり, 本調査は, 韓国におけるオリ・パラ教育の実態の解明の端緒として位置づくと考え

II. 調査の概要

1. 調査目的

本調査の目的は, 2020 年の東京オリ・パラに向けたオリ・パラ教育の展開の方向性を探るために, 2018 年の平昌オリ・パラに向けて韓国で行われているオリ・パラ教育の取り組みの実態を明らかにすることである.

2. 調査スケジュール

本調査は, 主に平昌オリ・パラの組織委員会関係者へのインタビュー調査と韓国の公立中学校におけるオリ・パラ教育の授業実践の参観を行った. 詳細については, 下記の通りである(表 1 参照).

表 1: 本調査のスケジュール

日付	2017.9.14	2017.9.15	2017.9.16
内容	インタビューA Youngjin Choi 氏 (平昌大会組織委員会 Education Team リーダー) 時間:15:30-17:00 場所:平昌大会組織委員会本部 2F会議室	実践 B 全羅南道靈光郡 公立白岫中学校 (Beaksu Middle School)	施設視察 ソウル市 Seoul Olympic Museum
		インタビューB 白岫中学校生徒(3名) ^{注 8)} 時間:13:45-14:00 場所:公立白岫中学校 (Beaksu Middle School)	
	実践 A ソウル市 公立清潭中学校 (Cheongdam Middle School)	インタビューC Arram Kim 氏 (平昌大会組織委員会 Education Team プロジェクトマネージャー) 時間:12:40-13:00,14:45-15:00 場所:公立白岫中学校 (Beaksu Middle School)	

3. 調査方法

調査方法としては、インタビュー調査とアンケート調査を採用した^{注 9)}。

インタビュー調査では、幅広いデータの収集を可能にすると考えられることから、「構造化された

質問とゆるやかに構造化された質問の混合」(メリアム, 2004) がなされる点に特徴がある半構造化インタビューを行った。質問項目は、下記の通りである(表 2 参照)。

表 2: インタビュー調査における質問項目

区分	質問項目
制度	オリンピック・パラリンピック教育として、どのような活動を展開しているか
	各校種のカリキュラム上において、オリンピック・パラリンピック教育はどのように位置づけられているか
	オリンピック・パラリンピック教育の予算はどのくらい確保されているか
	各種スポーツ競技団体との連携はあるのか
実態	学校においてオリンピック・パラリンピック教育をどのように行っているか
	体育でオリンピック・パラリンピック教育を行っている場合、健康活動、挑戦活動、競争活動、表現活動、余暇活動 ^{注 5)} のどこで行っているか
	オリンピック・パラリンピック教育に関する教材・資料はどのようなものがあるのか
	オリンピックやパラリンピアンは、オリンピック・パラリンピック教育に対してどのように関わっているのか
	ソウルオリンピック・パラリンピックは韓国にとってどのような大会であったか
	平昌オリンピック・パラリンピックはどのような大会として位置づけられているか
	ソウルオリンピック・パラリンピックのレガシー(ソウルオリンピック記念館等)を学校におけるオリンピック・パラリンピック教育に活用しているか
	これまでのオリンピック・パラリンピック教育の成果や課題は何か

アンケート調査は、授業実践後に生徒に対して行った。調査用紙は、下記の通りである(図 1 参照)。なお、質問項目については、早稲田大学

オリンピック・パラリンピック教育研究センター(2017)を参照した。

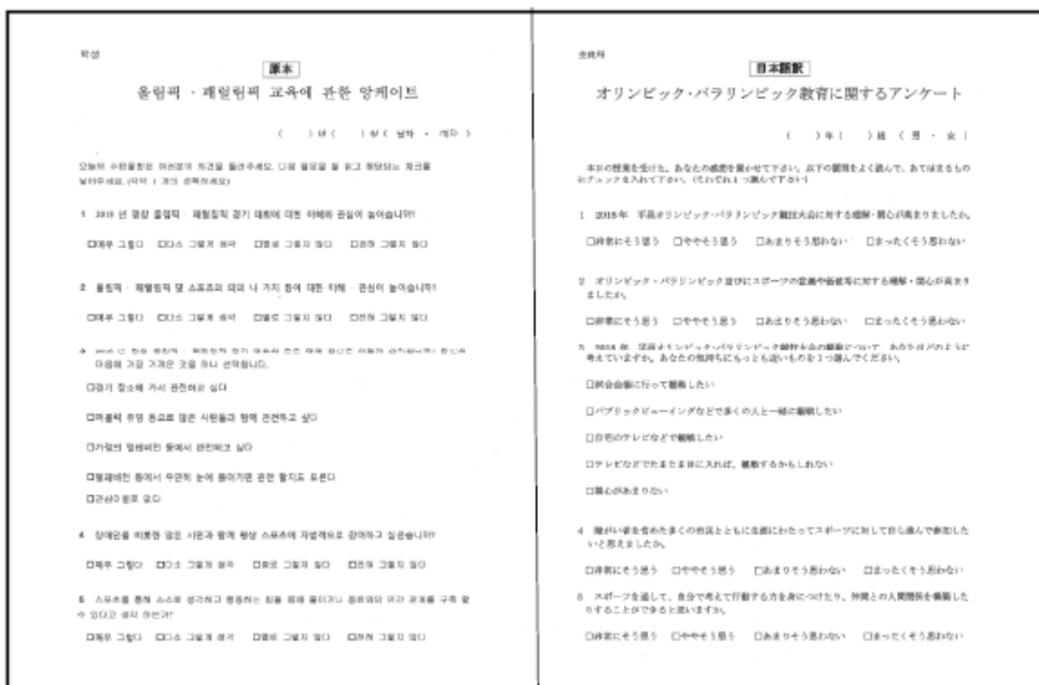


図 1: 生徒用アンケート調査用紙(原本及び日本語訳)

Ⅲ. 調査結果

1. 韓国におけるオリンピック・パラリンピック教育の制度

Youngjin Choi 氏（平昌大会組織委員会 Education Team リーダー）に実施したインタビューをもとに、韓国におけるオリ・パラ教育の制度について整理する（インタビューA）。

韓国では、2018 年の平昌オリ・パラに関する国

民の関心を高めること、そして未来社会のためのレガシーを残すことを目的としてオリ・パラ教育が展開されている。平昌オリ・パラ組織委員会には、2015 年に教育チームが結成され、「possibility」と「connected」というオリ・パラ教育の理念、及びコンテンツやプログラムが開発された。韓国のオリ・パラ教育のプログラムは、以下の 3 つの分野から構成されている（図 2 参照）。

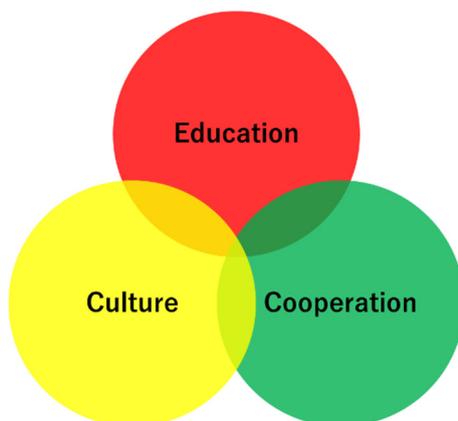


図 2: 平昌大会組織委員会のオリ・パラ教育の 3 つのプログラム

以下では、「Education」、「Culture」、そして「Cooperation」のそれぞれのプログラムについて整理していく。

はじめに、「Education」は、「Online Education Portal」、「School Visits」、そして「Model UN Conference」の 3 つのプログラムで構成されてい

る。「Online Education Portal」は、オリ・パラ教育用のホームページ「Official Pyeongchang Education Web Portal」（The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games, online）のことを指している（図 3 参照）。



図 3: 「Official Pyeongchang Education Web Portal」のトップ画像

当該ホームページは、「WATCH」、「TEACH」、「LEARN」、「DOWNLOAD」、「NEWS&EVENTS」、「ABOUT PYEONGCHANG」、そして「TAKE A

TOUR」の 7 つのカテゴリーで構成されている。それぞれのコンテンツを整理すると、以下の通りである（表 3 参照）。

表 3: Official Pyeongchang Education Web Portal コンテンツ一覧

カテゴリー	コンテンツ
WATCH	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリ・パラの歴史や価値 (オリ: Excellence, Friendship, Respect, パラ: Courage, Inspiration, Determination, Equality) を解説する動画 ・ 平昌オリ・パラで実施されるオリンピックの 15 種目^{注 10)}とパラリンピックの 6 種目^{注 11)}に関する, 歴史, ルール, 技術のポイントを解説する動画やクイズ
TEACH	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員用の指導案や教材^{注 12)}
LEARN	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒用の授業プリント
DOWNLOAD	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリ・パラ種目の塗り絵用の白抜きの絵
NEWS&EVENTS	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各地で行われる教育プログラムや文化プログラムの情報
ABOUT PYEONGCHANG	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平昌オリ・パラに関する最新情報
TAKE A TOUR	<ul style="list-style-type: none"> ・ ホームページを紹介する動画

「School Visits」は、組織委員会の教育チームのメンバーらが韓国全土の学校を訪問してオリ・パラについての講義や実技の指導を行うプログラムである。講義の内容は、主にオリ・パラの価値、2018 年平昌オリ・パラ、そして冬季種目の 3 つで構成されている。「Model UN Conference」は、韓国で以前から取り組まれてきた国連総会を模した討論会のような取り組みを活用したプログラムである。

次に、「Culture」は、主に韓国でこれまで行われてきた文化的活動の中にオリ・パラに関する内容を取り入れていく活動である。より多くの国民にオリ・パラへの関心を持ってもらうことを意図している。

最後に、「Cooperation」は、「UNESCO School Exchange」、「Dream program」、「スポーツキャンプ」、「スポンサー教育」、そして「スクールプログラム」の 5 つのプログラムから構成されている。「UNESCO School Exchange」は、平昌オリ・パラ組織委員会、江原道^{注 13)} (カンウォンドウ、平昌がある地域)の教育長、そして UNESCO が協力して、「UNESCO School」^{注 14)}の中で提携している学校を活用してオリ・パラ教育を合同で行うプログラムである。「Dream program」は、雪が降らない国の青少年たちを平昌に招待して冬季スポーツを体験してもらうプログラムである。平昌が初めてオリ・パラ招致を失敗^{注 15)}した 2004 年に考案されたプログラムである。「スポーツキャンプ」は、江原道の住民を対象に冬季スポーツに関する講習や体験

を提要するイベントである。「スポンサー教育」では、韓国全土の中学生、高校生が大会形式で「オリンピック」をテーマにプレゼンテーションを実施するイベントである。最後に、「スクールプログラム」^{注 16)}である。これは、江原道にある 40 校の学校が平昌オリ・パラに参加予定の 40 カ国の中から 1 校を選択し、その国の料理やあいさつなど文化について学び、実際に平昌オリ・パラではその国を応援するという「一校一国運動」^{注 17)}のようなプログラムである。

2. 韓国のオリンピック・パラリンピック教育の実態

1) 実施状況 (インタビュー A, C)

前述の Youngjin Choi 氏 (大会組織委員会 Education Team リーダー) 及び Arram Kim 氏 (大会組織委員会 Education Team プロジェクトマネージャー) に実施したインタビューをもとに、韓国におけるオリ・パラ教育の実態について整理する (インタビュー A 及びインタビュー C)。

「Education」についての実態は、次の通りである。オリ・パラ教育用のホームページは韓国全土の学校で活用され、現段階 (2017 年 9 月 14 日) で、2,730 人の教員が活用し指導案は 2,186 回ダウンロードされ、400,386 人の児童、生徒が学んでいる。「School Visits」は、2015 年度から始められ、2015 年度に 4 校、2016 年度に 20 校で実施しており、2017 年度は 180 校での実施を予定している。特に今年度は韓国全土から 450 校の申請があり、その中から聖火リレーのコースに隣接する

学校を中心に 180 校を選定した。そして、現在 (2017 年 9 月 15 日) のところ 115 校で実施済みで残すところ 65 校である。現在、平昌オリ・パラに向けた教育プログラムは多くの問題を抱えているが、中でも人材の不足は深刻であるということであった。現在は、Education Team の 3 人を中心に全国の学校を訪問している状況であるという。「Model UN Conference」では、「オリンピック」を議題に設定した討論会が実施され、「オリンピックアジェンダ」の作成が試みられている。

「Culture」についての実態は、次の通りである。「Culture」の代表的なプログラムの一つに音楽活動が挙げられる。韓国と北朝鮮の間にある DMZ (De Militarized Zone: 非武装中立地帯) で毎年行われる DMZ 国際音楽会と平昌大会組織委員会が連携して平和をテーマとしたイベントを実施したり、平昌で 8 つの学校の学生のオーケストラが連合音楽祭を実施して韓国代表選手を招待して平昌大会テーマソングを演奏したりする取り組みが行われている。他にも大小様々な文化的イベントの際に、オリ・パラの種目を体験できるようなオリ・パラ教育関連のブースを設けるなどして文化プログラムの充実を図っている。

最後に「Cooperation」についての実態は、次の通りである。「UNESCO School Exchange」では、韓国全土に 134 校ある UNESCO School において、オリ・パラ教育が実施されている。「Dream program」は、2004 年から今までで 14 回開催され、約 2,000 名の青少年が参加している。ちなみに、マレーシアの Chew Kai Xiang 選手は、このプログラムに参加して初めてスケートを経験し、2012 年度のユースオリンピックに参加した^{注 18)}。「スポーツキャンプ」では、特にパラリンピック種目に力を入れて行われており、2016 年度には約 3,000 人が参加した。「スポンサー教育」では、約 2,000 名 (317 校) が参加している。また、生徒を多く参加させた教員も表彰されるため、教員も積極的に参加をしている。「スクールプログラム」では、オリ・パラ教育として授業の中でインターネットを活用して、自分の応援する国の選手と会話をする取り組みも行なわれている。

その他にも、オリ・パラ両方の理解や関心を高

めるために、出来る限り全てのコンテンツの量をオリンピックとパラリンピックで半分ずつに統一したり、パラリンピックスポーツを直接実施する機会を増やす取り組みを行っている。また、「Culture」のプログラムを充実させることで、地域の人々のオリ・パラへの関心を高める取り組みも行っている。

2) 授業実践 A

- ① 日時: 2017 年 9 月 14 日 13 時 00 分-13 時 45 分
- ② 場所: ソウル市公立清潭中学校 (Cheongdam Middle School)
- ③ 授業者: Choi Jeachun 氏 (体育教師, 元カーリング韓国代表監督)
- ④ 生徒の内訳: 表 4 参照

表 4: 授業実践 A における生徒の内訳

	2 年生
男子 (人)	24
女子 (人)	24
合計 (人)	48

⑤ 授業内容:

授業は、体育館で行われ、講義と実技の 2 つの場面で構成されていた。

授業の前半は、カーリングについての講義が行われた。体育館の壇上に設置されたスクリーンにスライドを映す形式で、まず Choi Jeachun 氏から、カーリングの歴史、カーリングの用具、カーリング競技のルールや試合の進め方について講義が行われた。次に、カーリングの用具、カーリング競技のルール、試合における作戦、そして実際の試合に関する映像が流された。Choi Jeachun 氏の使用したスライドや映像は、オリ・パラ教育用のホームページ「Official Pyeongchang Education Web Portal」(The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games, online) からダウンロードできるものである。さらに、ほかのクラスで実施したカーリングの授業の映像が流され、授業で実際に行うグラウンドカーリング(カーリングのストーンがプラスチック

ク製の同じ形状で下にローラーが付いているもの
の進め方が説明された。講義では、生徒に質問
をしたり、復唱させたりして知識の定着を図って
いた。

授業の後半は、グラウンドカーリングが行われ
た。まず、二人組みになって向かい合い、ローラ
ー付きのストーン(以下「ストーン」と略す)を相手
のところで止まるくらい力で投げる練習が行われ
た。次に、6人1グループになり、2つのグルー
プが対戦形式で1人ずつストーンをハウス(カー
リングで用いられる同心円の)めがけて投げる練
習が行われた。ストーンがハウスに入ると生徒たち
から歓声が上がっていた。また、相手のストーンを
めがけて自分のストーンを投げる場面も見られた。

⑥ 生徒へのアンケート結果

アンケートの結果は、以下の通りである(図4)。
平昌オリ・パラに対する理解・関心(質問1)及び
オリ・パラの価値等(質問2)に関しては、「とてもそ
う思う」と「ややそう思う」と答えた生徒が90%近く

いた。平昌オリ・パラの観戦(質問3)に関しては、
会場やパブリックビューイングなどで直接観戦した
い生徒と、自宅でテレビなどを通して間接的に観
戦したい生徒を合わせると90%以上いた。また、
スポーツを通じた自発的行動や人間関係の構築
(質問5)に関しても「とてもそう思う」と「ややそ
う思う」と答えた生徒が90%近くいた。しかし、障
がい者を含めた生涯スポーツへの参加(質問4)に
関しては、「とてもそう思う」と「ややそう思う」と
答えた生徒が60%ほどであり、他の質問項目より
も低い値となった。このことは、特に質問3と関
連付けてみると、平昌オリ・パラを含めてスポ
ーツを「観る」という点においては高い値を示し
たが、スポーツを「する」という点には至ってい
ないことが考えられる。その原因としては、本授
業が技術的な上達よりはカーリングの楽しさに
触れるという点を意図した内容であったため、
生涯スポーツや障がい者と一緒にスポーツを行
なうなどの視点が不足していたことが推察され
る。

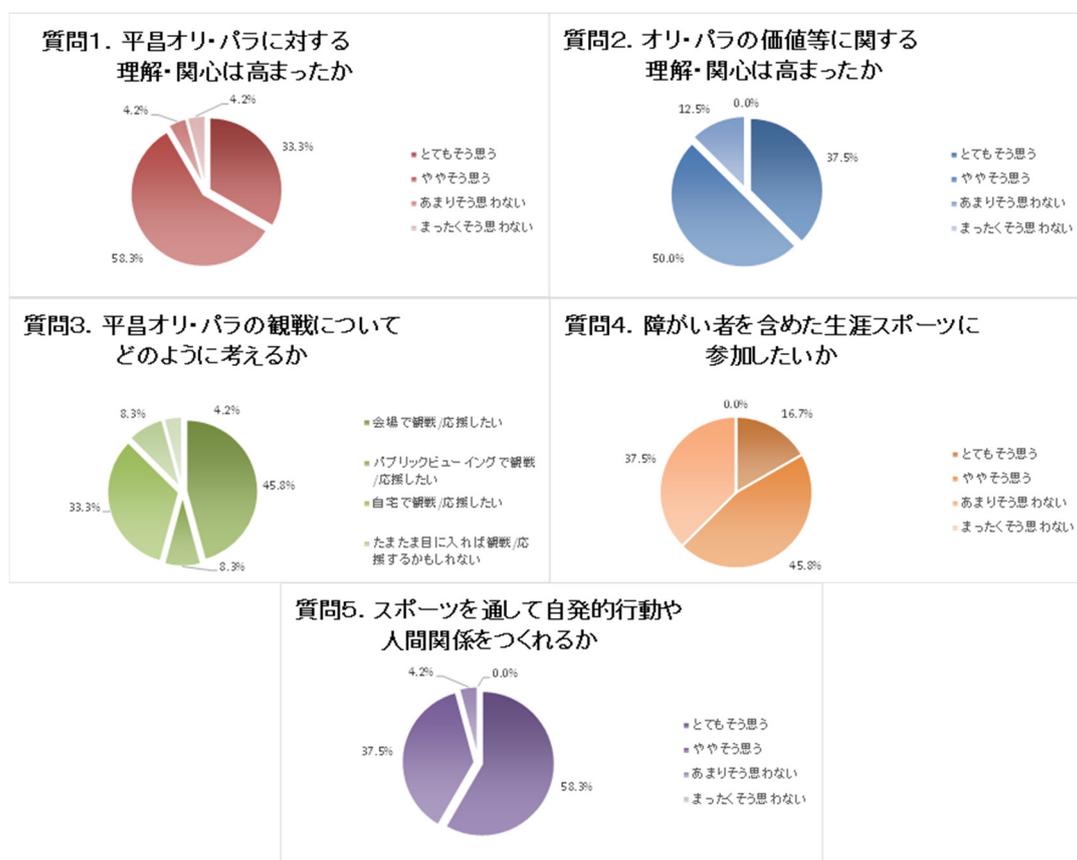


図4: 授業実践 A アンケート結果

3) 授業実践 B

(Beaksu Middle School)

① 日時: 2017 年 9 月 15 日 13 時 00 分-14 時 30 分

③ 授業者: Arram Kim 氏 (組織委員会 Education Team プロジェクトマネージャー)

② 場所: 全羅南道靈光郡公立白岫中学校

④ 生徒の内訳: 表 5 参照

表 5: 授業実践 B における生徒の内訳

	1 年生	2 年生	3 年生	合計
男子(人)	4	4	9	17
女子(人)	2	4	7	13
合計(人)	6	8	16	30

⑤ 授業内容:

授業は、「オリンピック・パラリンピックについて」と「スポーツと職業について」の 2 つのテーマで構成され、どちらも講義形式で授業が進められた。

「オリンピック・パラリンピックについて」では、オリンピックシンボル・パラリンピックシンボルの意味、オリ・パラの価値、聖火リレーのコース、マスコットの名前、平昌大会で実施予定の冬季種目のルールや競技の特徴、パラリンピックのガイドなどについて、教室の前のホワイトボードにスライドを映しながら説明が行われた。説明の中では、聖火リレーのコースや平昌大会のマスコットの紹介に関する動画も用いられていた。それらの動画は、オリ・パラ教育用のホームページ「Official Pyeongchang Education Web Portal」(The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games, online) からダウンロードできるものである。また、授業は生徒に質問をして手を挙げて答える形式で進められ、正解した生徒には平昌大会のマスコットのシールや人形がプレゼントされた。最後に、上述のオリ・パラ教育用のホームページが紹介され、オリ・パラについて勉強をする際に活用するように勧めていた。

続く、「スポーツと職業について」では、スポーツに関連する仕事についての講義が行われた。特に、講師の Arram Kim 氏がボブスレーのジュリー^{注 19)}を務めていることから、自らのスポーツ経験や審判の資格を獲得するまでの経験についての話

が中心であった。具体的には、ボブスレーの国際審判になるためには国内大会で審判の経験を積むとともに、試験をパスする必要があること、さらに 15 歳から国際審判になることができ、英語が使えなくても問題はない、などの内容であった。ボブスレーの国際審判という生徒たちがあまり知らないスポーツに関連する仕事であったため、生徒たちは話に聞き入っている様子であった。

⑥ 生徒へのアンケート結果

アンケートの結果は、以下の通りである(図 5)。平昌オリ・パラに対する理解・関心(質問 1)及びオリ・パラの価値等(質問 2)に関しては、「とてもそう思う」と「ややそう思う」と答えた生徒が 100%であった。平昌オリ・パラの観戦(質問 3)に関しては、会場やパブリックビューイングなどで直接観戦したい生徒と、自宅でテレビなどを通して間接的に観戦したい生徒を合わせると 90%以上いた。また、障がい者を含めた生涯スポーツへの参加(質問 4)やスポーツを通じた自発的行動や人間関係の構築(質問 5)に関しても「とてもそう思う」と「ややそう思う」と答えた生徒が 90%近くいた。つまり、全体的に全ての項目において高い数値であった。

特に、授業実践 A と比べると、障がい者を含めた生涯スポーツへの参加に関して、パラリンピックについての話や、選手以外のスポーツに関わる仕事について紹介していたことから、障がい者を含めた生涯にわたるスポーツとの具体的な関わり方を考える契機になったと推察される。

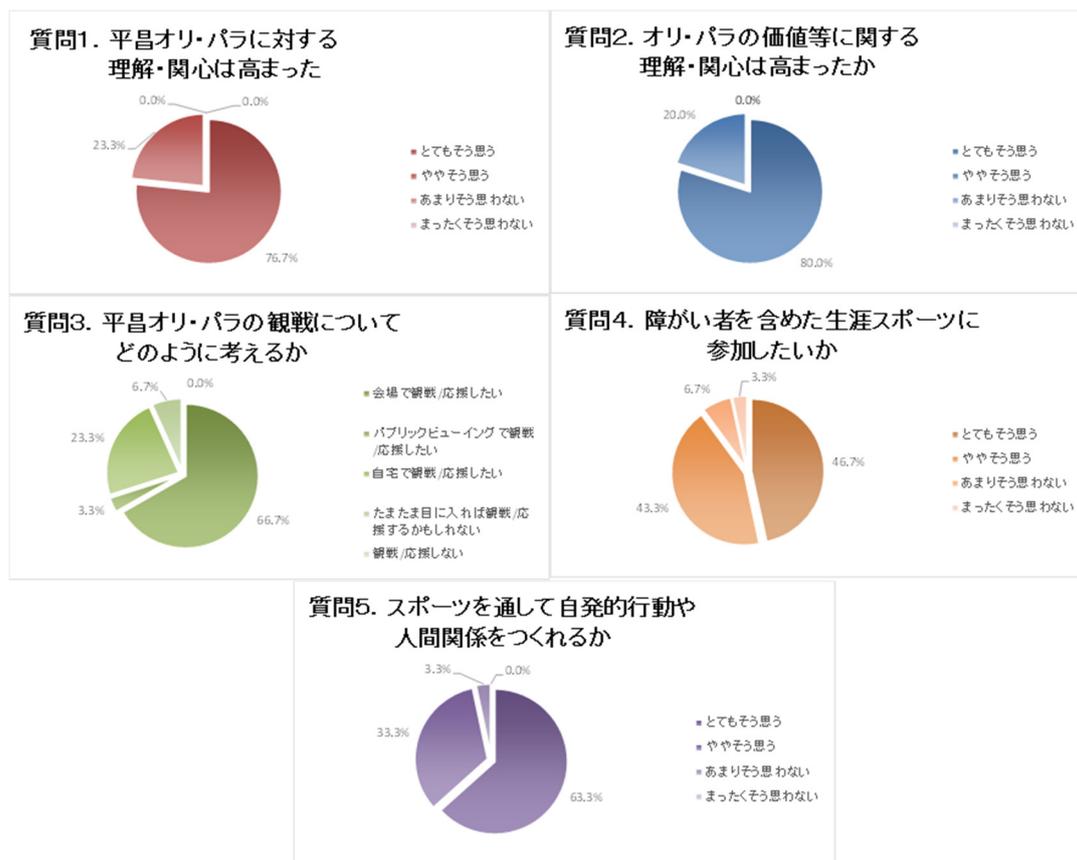


図 5: 授業実践 B アンケート結果

⑦ 生徒へのインタビュー結果:

授業に参加した生徒 3 名を抽出してインタビューを実施した(インタビューB)。インタビューでは、主に授業を受けた感想について質問した。その結果、「プレゼントをもらって気分がいい、楽しかった」(a 君)というように、実際に平昌オリ・パラ関連のグッズをもらったり、直接見たりすることが興味・関心につながるということがわかった。他にも、授業では直接使用されなかったが、Kim 氏が持参した聖火リレーのトーチのレプリカを休憩の時間に生徒が順番に持って遊んでいる様子も見られた。また、「冬のオリンピックの種目がわからなかったけど、講義を通して理解することができた」(b さん)や「冬のオリンピックは、種目が少ないと思っていたけど、実際は多かったことがわかった。」(c 君)というように、特に冬季スポーツに関しては講義で初めて知ることが多かったため、生徒の興味・関心も高かったと推察される。「パラリンピックでも外国人がたくさん出たほうがいいと思う」(c 君)という発言もあり、オリ・パラ教育が多文化理解へつながる可

能性も感じた。

4)オリ・パラ教育のための Seoul Olympic Museum
ソウル市には、1988 年のソウルオリンピック・パラリンピック競技大会の際に建設された競技場の周辺が「Olympic Park」として残されている。公園内には、コンサートホールや美術館、宿泊施設などがある。そして、公園の南西部にあるのが Seoul Olympic Museum である。1990 年 9 月 18 日に開館した「教育と娯楽を融合したテーマ型記念館」(Seoul Olympic Museum パンフレット)をコンセプトとしてこの施設は、韓国におけるオリ・パラ教育の重要な役割を担っている。そこで以下では、Seoul Olympic Museum の目的や内部の展示を概観したい。

Seoul Olympic Museum は、以下のような機能を果たすことを目的としている。

世界的な観光スポットをめざすと同時に、ソウルオリンピックの栄光と成果を再確認しオリンピック精神を継承、発展

させていくことで、未来を担う青少年に誇りを持たせる役割を担っています (Seoul Olympic Museum パンフレット)

つまり、オリンピズムの継承、発展を通じた青少

年の育成を企図した施設である。無料で入館できる施設内部は、3 階建 (地下 1 階, 地上 2 階) の構造で、以下の 5 つのテーマに分かれた展示が行なわれている (表 6 参照)。

表 6: Seoul Olympic Museum の展示一覧

テーマ	内容
Place of Peace (平和の場)	古代オリンピックの歴史, 近代オリンピックの歴史
Place of Harmony (調和の場)	ソウルオリンピックの大会誘致から閉会式までの歴史
Place of Prosperity (繁栄の場)	ソウルオリンピックの成果や課題, 記念品の展示
Place of Hope (希望の場)	韓国の体育の歴史, ソウルオリンピックの英雄, オリンピック公園の模型
Place of Glory (栄光の場)	オリンピックとスポーツをテーマとした映像館

(Seoul Olympic Museum パンフレットをもとに作成)

このように、オリンピック全般に関する歴史、ソウルオリンピックに関する歴史、そしてソウルオリンピックの成果や課題という順に過去から現在へという時間軸で展示が行なわれている。そしてこれらの展示に加えて、オリ・パラ教育として特に重要な点が、Seoul Olympic Museum には地下 1 階の資料室に加えて教育室が設置されていることである。教育室は 2 つの部屋に分かれており、一つは正面にホワイトボードやスクリーンがあり、30 ほどの座席がある教室のような空間で、もう一つは 4 人掛けの机が 5 つほどあり実験室のような空間である。そこでは施設内の展示を見た後に、オリ・パラについての講義を聞いたり、資料を調べたりする学習が展開されている。また、教育室内には学習の成果を展示するエリアがあり、オリ・パラ教育の成果が公開されている^{注 20)}。

IV. 今後の日本のオリ・パラ教育への示唆

最後に、本調査で得られた結果から、今後の日本のオリ・パラ教育の制度と実践への示唆について述べていきたい。

1. 制度に関する示唆

制度に関しては、韓国のオリ・パラ教育が、平昌大会組織委員会を中心に、他の競技団体や組織が協力する形で統一的行われている点が挙げられる。つまり、オリ・パラ教育を推進する組織の連携・統一が取れているということである。

Youngjin Choi 氏の話では、韓国でも 2015 年までは KOC, KPC や各競技団体がそれぞれオリ・パラ教育を実施していたが、2015 年にそれらを統括して平昌大会組織委員会がプログラムを開発し、それを協力団体が活用することで統一を図ったという。この組織の統一が図られたことで、実技を行うときには KOC が指導者を派遣したり、他のスポーツ関連イベントに参加してもらっていたボランティアをオリ・パラ教育の事業においても活用したりすることが可能になったという。また、学校で行われる実践においても、組織が統一されたことで、各学校がそれぞれの考えでオリ・パラ教育を行うのではなく、ある程度内容や質の統一が図れるようになった。一方で現在の日本のオリ・パラ教育は、東京都、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、日本オリンピック委員会 (JOC)、日本パラリンピック委員会 (JPC) がそれぞれオリ・パラ教育の主体となって活動している。「有識者会議」でも全国的なオリ・パラ教育の推進体制を構築するうえで、それらの団体の積極的な連携の必要性を指摘しており、今後も積極的に連携をとって進めていく必要がある。さらにアスリートの派遣に関しては、平昌大会組織委員会に所属しているアスリートを活用したり各地方の主催のイベントと連携を取ったりすることでアスリートの派遣にかかる費用の削減を試みている。このようなコンテンツのオリ・パラのバランスの調整やアスリート派遣の仕方についても組織的な統一によ

て、より円滑に行うことができるのではないだろうか。

2. 実践に関しての示唆

学校におけるオリ・パラ教育の実践に関して特筆すべきこととして、オリ・パラ教育用のホームページを活用した実践を挙げることができる。前述の通り、組織の統一を実施したことである程度均質的なオリ・パラ教育の実践を行なうことができるようになったが、それを支えているのがオリ・パラ教育用のホームページである。そこでは、組織委員会が開発したプログラムが掲載され、いつでも無料で教材や指導案がダウンロードできるようになっており、実際に実践調査を行ったソウル市公立清潭中学校 (Cheongdam Middle School) と全羅南道靈光郡公立白岫中学校 (Beaksu Middle School) でも活用されていた。こうした現場の教員がアクセスしやすいホームページの運営が望まれる。また、前述の日本におけるオリ・パラ教育の課題の一つであったオリンピック教育とパラリンピック教育のバランスに関しては、オリンピックとパラリンピックのコンテンツを半分ずつにして量的な均衡を図るとともに、馴染みの少ないパラリンピック種目を体験する機会を増やす取り組みを行っていた。日本でも積極的にパラリンピックに関する授業実践やイベントを実施して関心を広めていくことが急務であろう。さらに、これまで行われてきた教育関連の取り組みとの連携に関して韓国では、UNESCO SCHOOL との連携を積極的に行なっていた。日本には、現在 1037 校の学校が UNESCO SCHOOL に登録しているが、オリ・パラ教育との連携はまだ行なわれていない。今後、新たに連携して取り組むことも検討の余地がある。

学校以外での取り組みに関して特筆すべき点としては、多様な文化的活動が行われていることが挙げられる^{注 21)}。これらの活動は、より多くの国民に平昌オリ・パラに関心を持ってもらうことを意図している。特に、インタビューの中で紹介された DMZ 国際音楽会は、平和へのメッセージが強く押し出されたイベントである^{注 22)}。このような音楽祭とオリ・パラの連携の事例は、日本でも、日本オリンピック委員会が主催している「オリンピックコンサート」がある。その目的は、「オリンピック精神を

多くの方に広く伝えていく活動であるオリンピック・ムーブメントの推進」(オリンピックコンサートホームページ, online) とされている。このような文化的なプログラムを充実させることで国民全体のオリ・パラへの関心を高めることにつながっていく。

その他には、オリンピックミュージアムの活用という点も挙げられる。調査を実施した Seoul Olympic Museum には、展示ブースに加えて教室が 2 つ設置されていた。そこでは、展示ブースを見て学んだことをまとめたり、資料を調べたり、映像を見たりすることができ、そこでの学習の成果を展示するスペースもある。というのも、そもそも Seoul Olympic Museum 自体が教育を意図して設立されており、無料で入館できることもあり多くの子どもが訪れてオリ・パラについて学んでいる。このようなミュージアムを活用した学習は、日本でも「札幌オリンピックミュージアム」(札幌オリンピックミュージアムホームページ, online) や「秩父宮記念スポーツ博物館・図書館」^{注 23)} (日本スポーツ振興センター, online) を活用して行うことができるのではないだろうか。

V. まとめ

本調査は、現在日本で取り組まれている 2020 年東京オリ・パラに向けたオリ・パラ教育の展開の方向性を探るために、直近で冬季オリ・パラが開催される韓国におけるオリ・パラ教育の実態を明らかにすることを目的とした。本調査では、韓国におけるオリ・パラ教育の中心である平昌大会組織委員会の Education Team の方 (2 名) へのインタビュー、学校におけるオリ・パラ教育の実践視察 (2 校)、実際に授業を受けた生徒へのインタビュー (3 名)、そしてオリ・パラ教育関連施設の視察を実施した。そして、韓国における「Education」、「Culture」、「Cooperation」の 3 つの分野から構成されているオリ・パラ教育を整理し、日本のオリ・パラ教育に対して、以下のような示唆を得ることができた。制度に関しては、さらなる組織的な連携の必要性が示唆された。実践に関しては、学校教員がアクセスしやすいオリ・パラ教育用ホームページの運営、UNESCO SCHOOL などの既存の教育プログラムとの連携、パラリンピック関連のプロ

グラムの充実, 文化的プログラムの充実, そしてオリ・パラ関連施設の活用が示唆された. 他方で, 本研究の限界として, 緒言で指摘した持続可能なオリ・パラ教育のための方策や地域の特色を生かしたオリ・パラ教育の構想は十分に検討できなかった. 今後のさらなるオリ・パラ教育の充実のためにも, 上記の示唆を可能な限り踏襲することを検討していきたい.

注

注 1)

各団体の取り組みは以下の通りである.

政府(スポーツ庁)は, 「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」を展開しており, 2017年度は全国 20 地域でオリ・パラ教育の推進を行なっている(早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター, online ほか).

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会では, 「東京 2020 教育プログラム」(愛称: 「よいい, ドン!」)を展開しており, オリ・パラ教育に取り組む学校の教育事業を東京 2020 オリンピック・パラリンピック教育推進校(愛称: 「よいい, ドン! スクール」)として認証する制度をつくり, オリ・パラ教育の実践を推奨している(東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ, online).

東京都では, 2014(平成 26)年 10 月に有識者会議を設置し, オリ・パラ教育の進め方に関して検討を重ね, オリ・パラ教育の 4 つの目標(自らの目標を持って自己を肯定し, 自らのベストを目指す意欲と態度を備えた人, スポーツに親しみ, 「知」, 「徳」, 「体」の調和のとれた人, 日本人としての自覚と誇りを持ち, 自ら学び行動できる国際感覚を備えた人, 多様性を尊重し, 共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人)と 3 つの方針(全ての子供が大会に関わる, 体験や活動を通じて学ぶことを重視する, 計画的・継続的に教育を展開する)を定めた. そして, 具体的には, オリ・パラ教育推進校の指定, オリンピアン・パラリンピアン等の学校派遣, 学習読本と映像教材(補助教材)の作成などに取り組んでいる(東京都教育委員会, online).

日本オリンピック委員会は, 2011 年度からオリンピックズムやオリンピックの価値をより身近に感じてもらうために, オリンピアンを先生として中学校 2 年生を対象に「オリンピック教室」(運動の時間と座学の時間)を実施している(日本オリンピック委員会ホームページ, online).

日本パラリンピック委員会は, 日本財団パラリンピックサポートセンターと協力して, 国際パラリンピック委員会(IPC)公認教材「I'm POSSIBLE」を開発, 普及活動を行なっている(日本財団パラリンピックサポートセンターホームページ, online).

また, これらの組織は, 政府(スポーツ庁)が中心となつて行なっている「オリンピック・ムーブメント全国展開事業」において, 筑波大学, 早稲田大学, 日本体育大学, 及びそれぞれの大学に割り振られたオリンピック・パラリンピック教育推進地域の教育委員会や NPO 団体等と連携して「オリンピック・パラリンピック教育全国コンソーシアム」を形成し, 情報共有を行なっている.

注 2)

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」に関する事業計画及び 2016 年度の実践の詳細に関しては, 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター(online), 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(online)及び日本体育大学オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業(online)を参照していただきたい.

注 3)

平昌オリ・パラの開催期間は, それぞれ 2018 年 2 月 9 日-2 月 25 日(オリンピック), 2018 年 3 月 9 日-3 月 18 日(パラリンピック)である.

注 4)

世界各国のオリ・パラ教育の実態について論じられている日本オリンピックアカデミー「ポケット版オリンピック事典」編集委員会(2008), 宮崎(2016), ナウル(2016)でも, 韓国のオリ・パラ教育の実態は明記されていない.

注 5)

韓国では, 2011 年に教育課程が改訂され, 健康活動, 挑戦活動, 競争活動, 表現活動, そして余暇活動の 5 つの区分で内容が構成された(朴, 2014).

注 6)

本報告は, オリ・パラ教育に関する有識者会議(朝原宣治氏ほか 21 名:2016 年 4 月 1 日-2017 年 3 月 31 日)の最終報告である.

注 7)

石坂・松林(2013)は, メガイベントとしてのオリンピックの影響を研究するには, オリンピックを一過性のイベントと考えずに, 「準備期(IOC への申請段階と招致が決まった後の準備段階), 開催期, ポストイベント期からなる『オリンピックサイクル』」(石坂・松林, 2013, p. 18)という枠組みを前提に多角的にアプローチする必要性を指摘している.

注 8)

生徒へのインタビューに関しては, 基本的に学校の許可が必要となる. その上で, 回答してくれた 3 名は, 授業の合間の休憩時間に声をかけてインタビューへの回答を承諾してくれた生徒である. 授業実践 B に関しては, 全校生徒を対象に 2 授業分の時間を活用してオリ・パラ教育を実施したため, 予め学校の責任者の許可をとることができたが, 授業実践 A に関しては, 通常の授業スケジュールの中の 1 授業分の時間を活用してオリ・パラ教育を実施したため, 終わってすぐ後に次の授業があることなどから, 学校の責任者の許可を得ることができなかった.

注 9)

調査に際して, 通訳として Yang Hee Jung 氏と Youn Hyun-su 氏に協力をいただいた. Yang Hee Jung 氏は, Korea Flying Tours LTD に所属する通訳である. Youn Hyun-su 氏は, 筑波大学大学院修士課程(体育研究科体育方法学専攻)で修士号を取得し, 現在は韓国のソウル市清潭中学校で体育教師をしている.

注 10)

平昌大会のオリンピック種目は, アルペンスキー, スキージャンプ, クロスカントリースキー, ノルディック複合, フリースタイルスキー, バイアスロン, スノーボード, ボブスレー, リュージュ, スケルトン, カーリング, アイスホッケー, フィギアスケート, スピードスケート, ショートトラックスピードスケートの 15 種目である.

注 11)

平昌大会のパラリンピック種目は, パラアルペンスキー, パラバイアスロン, パラスノーボード, パラクロスカントリースキー, パラアイスホッケー, ホイールチェアカーリングの 6 種目である.

注 12)

「TEACH」はログインの際に ID が必要で, 各学校に配布されている.

注 13)

江原道は, 韓国北東部に位置する町で, その中心地が平昌である.

注 14)

「UNESCO SCHOOL」は, 第二次世界大戦後に国際連合の専門機関として発足した UNESCO (United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization) が 1953 年に「ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため, 国際理解教育の実験的な試みを比較研究し, その調整をはかる共同体」(ユネスコスクールホームページ, online)として創設した機関である. 「UNESCO SCHOOL」は, 質の高い教育を実践し, 普及させる, 人材養成, 平和, 正義を追求する, そして世界中の青少年の教育ニーズに対応するという 3 つの活動を行う機関であり, 地球規模の問題に対する国連システムの理解, 人権及び民主主義の理解と促進, 異文化理解, 環境教育の 4 つの内容から構成されている.

注 15)

平昌は, 2010 年(ソルトレイク), 2014 年(ソチ)の

冬季オリ・パラの開催地に立候補していたが、2 回とも落選していた。2011 年 7 月 6 日に開催された第 123 次 IOC 総会(南アフリカ共和国ダーバン)において、ミュンヘン(ドイツ)、アヌシー(フランス)と決選投票となり、平昌が過半数の票を得て 2018 年の冬季オリ・パラの開催地として決定した。ちなみに平昌は、選手村と各競技会場の距離が近いコンパクトな大会、及びこれまでの冬季オリ・パラが欧米を中心に行われていたことから冬季スポーツのアジアへの広まりを意図した大会という 2 つのコンセプトで招致活動に取り組んでいた(朝日新聞, 2011)。

注 16)

インタビューでは、「スクールプログラム」は、中国と韓国のオリンピック協会(NOC)が共催で行なっているということであった。しかし、共催に至る背景に関しては、通訳を介したインタビューであったことなどから確認が取れなかった。

注 17)

「一校一国運動」は、1998 年に開催された長野冬季オリンピック・パラリンピック競技大会の際に、長野市内の小中学校、特別支援学校合わせて 75 校で行われたオリ・パラ教育のプログラムである。具体的には、大会開催前には、各学校で交流国を決め、その国の文化や歴史の調査、その国の語学の学習、そして手紙やビデオレターによる交流などの活動が行われた。また、大会期間中は交流国の選手村の入村式への参加や、学校での選手との交流会などの活動が行われた。このような「一校一国運動」は、2002 年のソルトレイク冬季オリンピック・パラリンピック競技大会、2006 年のトリノ冬季オリンピック・パラリンピック競技大会、そして 2008 年の北京夏季オリンピック・パラリンピック競技大会などでも行われた(日本オリンピック・アカデミー「ポケット版オリンピック事典」編集委員会, 2008, p. 186)。

注 18)

ユースオリンピックとは、「次代を担う、子どもたちのスポーツとオリンピズムへの関心を保つ」(佐野,

2015, p. 696)ことを目的とした 14 歳から 18 歳までのアスリートを対象とした国際総合競技大会である。2007 年に IOC のジャック・ロゲ会長が提案し、2010 年に第 1 回シンガポール大会が開催されて以降、夏季、冬季のオリ・パラが開催される年に時期をずらして開催されている。なお、これまでの開催都市と時期は、以下の通りである。夏季: 第 1 回シンガポール大会(2010)、第 2 回南京大会(2014)、冬季: 第 1 回インスブルック大会(2012)、第 2 回リレハンメル大会(2016)

注 19)

ボブスレーの「国際競技規則 2017 年版」(International Bobsleigh & Skeleton Federation, 2017)によれば、ジュリーは「当該競技大会における最高権威であり、IBSF 国際競技規則に照らした最終決定権を有して、大会を指揮する」存在であり、「ジュリーの決定は、最終であり、議論の余地はなく、即効である」。また、ジュリーは具体的に、以下の点に関して責任を負っている。

氷温の変更、その交換、ランナーの交換、滑走のやり直し、練習滑走回数の削減、競技大会の中断と中止(競技委員長とトラック管理者との協議の結果)、競技参加者数の削減、規則違反のペナルティー、スタートの溝の長さ、パイロットボブの数、温度及び重量検査、抗議への対応措置、選手の競技参加の禁止、危険な場合のトラックの閉鎖(International Bobsleigh & Skeleton Federation, 2017)

注 20)

調査を実施したときは、小学生の作った手作りメダルが展示されていた。

注 21)

インタビューでは、韓国におけるオリ・パラ教育において文化的活動を重視する背景には、韓国における移民の増加に伴った多文化共生社会の実現という社会的な課題があるということであった。実際に、朝日新聞 2016 年 9 月 21 日朝刊によると、少子高齢化が進む韓国では、人口の減少が経済にも影響を及ぼすことが懸念されており、「韓

国人と結婚して外国から移り住む『結婚移民者』への支援に、韓国の政府や自治体が力を入れている」ということである。

注 22)

DMZ 国際音楽会は、政治的な意味合いが強く実施に際して IOC 等から注意を受けなかったのかと伺ったところ、特にそのような指導はなく成功したとのことであった。

注 23)

「秩父宮記念スポーツ博物館・図書館」は新国立競技場が完成するまで休館中である。

引用・参考文献

- ・ 朝日新聞(2011)7月7日付 東京朝刊
- ・ 朝日新聞(2016)9月21日付 東京朝刊
- ・ International Bobsleigh & Skeleton Federation (2017) International Bobsleigh Rules 2017
http://www.ibsf.org/images/documents/downloads/Rules/2017_2018/2017_International_Rules_BOBSLEIGH.pdf
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ 石坂友司・松林秀樹(2013)オリンピックとスポーツ・メガイイベントの社会学, 石坂友司・松林秀樹編, <オリンピックの遺産>の社会学, 青弓社, 東京, pp. 7-32
- ・ 金載祐(2011)戦前朝鮮 YMCA のスポーツ導入に関する研究, 阿部生雄監, 体育・スポーツの近現代—歴史からの問いかけ—, 不味堂出版, 東京, pp. 295-309
- ・ 宮崎明世(2016)世界のオリンピック・パラリンピック教育, 体育科教育, 64(6), 62-65
- ・ 日本オリンピック・アカデミー「ポケット版オリンピック事典」編集委員会(2008)ポケット版オリンピック事典, 楽, 東京
- ・ 日本オリンピック委員会ホームページ(online)
<http://www.joc.or.jp/>
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ 日本スポーツ振興センター(online)秩父宮記念スポーツ博物館・図書館.
http://www.jpn_sport.go.jp/muse/
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ 日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業(2017)平成 28 年度 スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」報告書
- ・ 日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業(N-cope)ホームページ(online)
<http://www.nittai.ac.jp/ncope/index.html>,
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ 日本財団パラリンピックサポートセンターホームページ(online)
<https://www.parasapo.tokyo/>
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ オリンピックコンサート ホームページ(online)
<http://www.harmonyjapan.com/joc2015/about>
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議(2016)オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ 朴京眞(2014)韓国における「身体活動の価値」を中心とした教育課程, 体育科教育, 62(9), 34-37
- ・ ナウル:筑波大学オリンピック教育プラットフォーム・つくば国際スポーツアカデミー訳(2016)オリンピック教育, 大修館書店, 東京
- ・ 佐野慎輔(2015)オリンピックのメガ化, 中村敏雄ほか編, 21 世紀スポーツ大事典, 大修館書店, pp. 688-696
- ・ メリアム:堀薫夫ほか訳(2004)質的調査法入門, ミネルヴァ書房, 京都
- ・ 札幌オリンピックミュージアムホームページ(online)
<http://sapporo-olympicmuseum.jp/>
 (参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ The PyeongChang Organizing Committee for the 2018 Olympic & Paralympic Winter Games(online)Official Pyeongchang

- Education Web Portal.
<http://edu.pyeongchang2018.com/front/main>
(参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ホームページ(online)
<https://tokyo2020.jp/jp/>
(参照日 2017 年 10 月 3 日)
 - ・ 東京都教育委員会(online)東京都オリンピック・パラリンピック教育.
<https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/index>
(参照日 2017 年 10 月 3 日)
 - ・ 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(2016)平成 27 年度スポーツ庁委託事業オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業報告書
 - ・ 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)ホームページ(online)
<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp>
(参照日 2017 年 10 月 3 日)
- ・ ユネスコスクールホームページ(online)
<http://www.unesco-school.mext.go.jp>
(参照日 2017 年 10 月 3 日)
 - ・ 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター(2017)平成 28 年度スポーツ庁委託事業オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業報告書
 - ・ 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター(Waseda ROPE)ホームページ(online)
<https://www.waseda.jp/prj-w-olypara/>
(参照日 2017 年 10 月 3 日)